

# 吉村順三の前期住宅作品における平面構成システムについて

金光 堅\*・河田 智成\*\*

(令和5年11月24日受付)

## On the Plan Configuration System in Junzo Yoshimura's early residential works

Ken KANEMITSU and Tomonari KAWATA

(Received November 24, 2023)

### Abstract

In this paper, we will create and analyze three types of diagrams abstracting the plan of Yoshimura's early residential works, and clarify the plan composition system in the subject works. In this paper, these three types of diagrams are: Diagram A, which shows the function, form, size, and adjacency of the elements composing the plan; Diagram B, which shows the connection relationship of the functions of the elements composing the plan; and Diagram C, which shows the figure-ground relationship of the exterior, interior other than the living room, living room, fireplace, and intermediate area in the plan. Through these diagrams, we see the dining room as a node as a functional element and the living room as a configurational node that generates a dynamic landscape. It was also evident that many of the houses were found to have fireplaces that were back-to-back with the garden, revealing a technique of shifting the visual view from the living room from the fireplace to the garden.

**Key Words:** plan, space, continuity, node, Junzo Yoshimura

## 1. はじめに

### 1-1. 吉村順三について

吉村順三(1908-1997)は、自然や伝統、日常の暮らしを重視した設計活動で知られる、日本を代表する建築家である。吉村は幼い頃から建築に興味をもち、東京美術学校(現東京藝術大学)へと進学した。その後、アントニン・レーモンド事務所で10年間設計の仕事に携わり、1941年に吉村設計事務所を設立して、「軽井沢の山荘」「青山タワービル」などの代表作をはじめ、個人住宅から公共建築にわたる多くの作品を残している。

### 1-2. 研究対象と資料

本稿では、吉村が設計した前期住宅作品を対象とする。資料としては、この時期の彼の代表的な住宅作品を網羅的にまとめた『吉村順三作品集1941-1978』に掲載された図面等を用いる<sup>1)</sup>。具体的な対象作品は、本稿第2章で取り上げる17の住宅である。これは資料とした作品集の内、特殊な敷地環境である「軽井沢の山荘」などの山荘シリーズ、家族間のプライバシーが計画に反映した「湘南秋谷の家」「国際文化会館住宅」といった二家族のための住宅を除いた住宅作品である。

### 1-3. 既往研究と研究目的・方法

吉村に関する研究は、特に吉村の没後、すでに多数発表

\* 広島工業大学大学院工学系研究科環境学専攻博士前期課程

\*\* 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

されている。武森祐次によれば、それらは、①設計手法を明らかにする研究、②設計思想を明らかにする研究、③住宅作品の特徴を明らかにする研究の3つに分類される<sup>2</sup>。本稿は、その内の③住宅作品の特徴を明らかにする研究の一つと言える。

本稿では、吉村が設計した前期住宅作品を対象として、その平面図を抽象化した3種のダイアグラムを作成・分析し、対象とする作品における平面構成システムを明らかにする。また、対象作品の平面構成システムから、その住宅の空間的特徴、空間的経験にも触れてみたい。

本稿で作成する3種のダイアグラムは、前田忠直らによるルイス・カーンをはじめとする建築家の「住宅作品における生成過程の研究」で提案されたものを下敷きにした<sup>3</sup>。本稿では、この3種のダイアグラムを、平面を構成する要素の機能・かたち・大きさ・隣接関係を示すダイアグラムA、平面を構成する要素の機能の接続関係を示すダイアグラムB、平面における外部・リビング以外の内部・リビング・暖炉・中間領域の図・地関係を示すダイアグラムCとする。

## 2. ダイアグラムA・Bから見る前期住宅各作品

- ①代々木の家 (1954) : 主にキッチン・ダイニング・リビングの3つからなる雁行型平面である。1階はパブリック空間、2階は寝室や子供室からなるプライバシー空間となっている。エントランス (南側) は、ダイニングやリビングにアクセスできる中央に配置されている。異形な階段が平面中央に配置される。エントランスまでのアプローチは装飾的である。庭は敷地北側にあり、リビング及びダイニングから視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。「E H - L - D - K - E H」のループとなる。
- ②自由が丘の家 (1955) : L形平面である。エントランス (東側) から、ダイニングキッチン及びピアノ室にアクセスする。ピアノ室左斜め奥にリビングがあり、左側にウッドデッキが配置されている。ピアノ室上部は吹き抜けとなっている。庭は敷地北西側にあり、リビングやピアノ室から視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。2階は、寝室及び書斎の構成になっている。
- ③南台町の家 (1957) : 長方形平面 (縦型) である。1階がパブリック空間、2階が寝室や子供室などからなるプライバシー空間となっている。敷地からエントランス (東側) までは、奥へと引き込むようなアプローチとなっている。大きな庭が敷地西側にあり、主にリビング及びダイニングから視認できる。暖炉は、リビングとダイニングの間の位置に配置されている。1階には廊下がなく、「E H - L - D - K」のループとなる。リビング奥に書斎が置かれている。
- ④千駄ガ丘の家 (1958) : L型平面である。1階建てで、パブリック空間とプライバシー空間が上下で分かれている。エントランス (西側) から、キッチン及びリビングにアクセスできる。エントランスまでのアプローチは装飾的である。庭は敷地西側にあり、リビングから視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。1階は「E - L - D - K」のループとなる。MB、W、CB、L、Kへの移動は、Dが基点となる。
- ⑤萩窪の家 (1959) : への字型平面である。への字型の真ん中Y軸を境に、東側にパブリック空間、西側にプライバシー空間 (寝室や水廻り) の構成となっている。エントランス (南側) は、への字型のヒンジ部に位置し、キッチンやリビングにアクセスできる。庭は敷地北側にあり、リビング及びダイニングから視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。「E - L - D - K」のループとなる。
- ⑥青山の家 (1959) : 長方形平面 (横型) である。1階はエントランス (南側) の西側にキッチン、北側にリビング、東側に寝室の構成となっている。2階は寝室や水廻りからなるプライバシー空間となっている。敷地からエントランス (東側) までは、奥へと引き込むようなアプローチとなっている。池のある小さな庭が敷地北側にあり、リビング及び寝室から視認できる。リビングと寝室のずれによる雁行に沿って、縁側が庭に面して置かれている。WR、K、EH、Bへの移動は、LDが基点となる。暖炉はない。
- ⑦池田山の家 (1965) : L型平面である。1階建てで、パブリック空間とプライバシー空間が上下階で分かれている。エントランス (東側) から、キッチン及びリビングにアクセスできる。エントランスまでのアプローチは装飾的である。池のある大きな庭が敷地北西側にあり、主にリビングから視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。Fa、K、E、Lへの移動は、Dが基点となる。リビング奥にピアノ室が置かれている。
- ⑧浜田山の家 (1965) : 長方形平面 (横型) である。眺望、日当たりに配慮して2階に主要室を配置されている。2階東側からLDK、和室、寝室の構成となっており、プライバシーからセミパブリック、そしてパブリックへと明確なゾーン分けがされている。寝室や水廻りなどのプライバシー空間へは廊下を通してアクセスできる。庭は敷地南側にあり、庭に面するリビングや和室、寝室から視認できる。暖炉は、リビングとダイニングに向けて置かれている。
- ⑨久我山の家 (1965) : 長方形平面 (横型) である。2階に主要室、1階は主に仕事場の構成となっている。2階

〔表1〕前期住宅作品の平面構成システム

	①代々木の家(1954)	②自由が丘の家(1955)	③南台町の家(1957)	④千駄ヶ丘の家(1958)	⑤萩窪の家(1959)
平面図					
ダイアグラム A					
ダイアグラム B					
ダイアグラム C					
	⑥青山の家(1961)	⑦池田山の家(1965)	⑧浜田山の家(1965)	⑨久我山の家(1965)	⑩分譲地に建つ小住宅(1966)
平面図					
ダイアグラム A					
ダイアグラム B					
ダイアグラム C					

図版出典：『吉村順三作品集1941-1978』新建築社、1978年。

〔表1〕 前期住宅作品の平面構成システム (つづき)

	⑪湘南茅ヶ崎の家 (1967)	⑫箕町の家 (1968)	⑬高樹町の家 (1970)	⑭田園調布の家A (1970)
平面図				
ダイアグラム A				
ダイアグラム B				
ダイアグラム C				
	⑮京都西山の家 (1976)	⑯田園調布の家B (1976)	⑰伊豆多賀の家 (1977)	凡例
平面図				
ダイアグラム A				<ul style="list-style-type: none"> <li>L: リビング</li> <li>OL: アウトドアリビング</li> <li>Fa: 家族室</li> <li>D: ダイニングルーム</li> <li>K: キッチン (台所)</li> <li>J: 和室</li> <li>S: 階段</li> <li>ES: 外部階段</li> <li>E: 玄関</li> <li>EH: 玄関ホール</li> <li>Po: ポーチ</li> <li>G: ガレージ</li> <li>A: 吹き抜け</li> </ul>
ダイアグラム B				<ul style="list-style-type: none"> <li>B: 寝室</li> <li>CB: 子供室</li> <li>MB: 主寝室</li> <li>WR: 書斎</li> </ul>
ダイアグラム C				<ul style="list-style-type: none"> <li>P: ピアノ室</li> <li>At: アトリエ</li> <li>WR: 仕事場</li> <li>W: 水廻り</li> <li>H: 家事室 (女中室)</li> <li>Gu: 客室</li> </ul>
				<ul style="list-style-type: none"> <li>Ba: バルコニー</li> <li>T: テラス</li> <li>WD: ウッドデッキ</li> <li>V: 縁側</li> <li>Ga: 庭</li> <li>Li: 光庭</li> </ul>

図版出典：『吉村順三作品集1941-1978』 新建築社、1978年。

へは内部階段及び外部階段の2つのアクセス方法がある。キッチンが独立している。庭は敷地南側にあり、2階においてはリビングと和室と寝室から、1階においては仕事場から視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。

⑩分譲地に建つ小住宅(1966)：正方形平面である。若いカップルのために建てられたローコストRC住宅である。LDKと寝室、水廻りで構成されている。暖炉はない。

⑪湘南芽ヶ崎の家(1967)：逆L型プランである。2階が主要室となっている。1階は主に家事室や客間、機械室が配置されている。エントランス(2階北側)から、リビングやダイニング、階段にアクセスできる。エントランスまでのアプローチは装飾的である。LDKがそれぞれ独立している。庭は敷地南西側にあり、リビングやダイニングから視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。2階平面中央に光庭がある。「E-L-D-K-S-E」のループとなる。B、K、E、L、Sへの移動は、Dが基点となる。

⑫筈町の家(1968)：逆L型平面である。2階建てで、パブリック空間とプライバシー空間が上下階で分かれている。エントランス(北側)から、廊下を通過してキッチンやリビングなどにアクセスする。暖炉はない。L-Dは接続している。キッチンは独立している。庭は敷地西側にあり、リビングから視認できる。

⑬高樹町の家(1970)：数寄屋風の中廊下型住宅である。1階建てである。土間をもつエントランス(西側)から、廊下を通過してキッチン及びリビングダイニングにアクセスする。日本庭園のような庭が敷地南側にあり、LDから視認できる。キッチンは独立しており、キッチン横に女中室が配置されている。暖炉はない。

⑭田園調布の家A(1970)：長方形平面(縦型)である。3階建てで、1階と2、3階で住居人が異なる。1階エントランス(東側)は、平面中央に配置されておりリビング及び各個室にアクセスできる。1階はLDKとなっており、「E-L-D-K」のループとなる。庭は敷地北西側にあり、リビングから視認できる。2階エントランス(東側)へのアクセスは、外部階段からとなっており、2階から3階へのアクセスは内部螺旋階段が使われる。2階もLDKとなっており、「2H-L-D-K-B」のループとなる。リビングの形状は台形で、リビング下に寝室、寝室下にアトリエの構成となっている。

⑮京都西山の家(1976)：逆L型平面である。2階建てで、パブリック空間とプライバシー空間が上下階で分かれている。エントランス(西側)は、キッチンに通じている。キッチンは独立しており、L-Dは接続している。リビング奥は、客室及びアトリエの構成となってい

る。庭は敷地南側にあり、リビング及びダイニングから視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。2階は、和室や水廻り、寝室などが置かれている。アトリエ上部は、吹き抜け空間となっている。

⑯田園調布の家B(1976)：長方形平面(縦型)である。3階建てで、1階は主にガレージや和室、2階は主要室、3階は主に寝室の構成となっている。2階へは、外部階段及び内部階段からアクセスできる。キッチンは2階エントランス横に独立しており、L-Dは接続している。庭は敷地東側にあり、和室(1階)やリビング(2階)から視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。

⑰伊豆多賀の家(1977)：雁行型平面である。2階建てで、1階西側に寝室や書斎などのプライバシー空間、1階東側はパブリック空間の構成となっている。エントランス(南側)から、キッチン及びリビングなどにアクセスできる。キッチンは独立しており、L-Dは接続している。アウトドアリビングがリビング奥に配置されている。1階は「E-L-D-K」のループとなる。2階は、寝室や水回りで構成される。庭は敷地北側にあり、リビングやダイニングから視認できる。暖炉は、リビングに向けて置かれている。

### 3. ダイアグラムA・Bから見る前期住宅作品の平面分析

#### 3-1. 平面における主要室の位置づけ

ダイアグラムAを通して、前期住宅作品の平面形状は、雁行型・L型・長方形型・への字型の大きく4タイプに分けられた。そして、前期住宅作品の平面的特徴として、次の点が挙げられた。

リビング：L型平面の場合、Lの端部のどちらかにリビングが見られた(②④⑦⑪⑫)。雁行型平面の場合、雁行部分にリビングが見られた(①⑥⑰)。また、主にこれら2つの型のリビングの開口部は、庭に向けてL字型となっていた(①②④⑥⑦⑪⑰)。⑰伊豆多賀の家においては、アウトドアリビングがL字型となっている。

廊下：吉村は、寝室や水回りといったプライバシー空間には廊下を設けているが、主要室への動線に廊下は極力設けていないことが分かった。プライバシー空間における廊下を除いて、17作品中12作品に廊下が設けられていなかった(①②③④⑤⑥⑦⑩⑪⑭⑮⑯)。玄関を中央に配置することで、各諸室へのアクセスを廊下なしでも行き来できるプランがいくつか散見された。

外部アプローチ：2階に主要室がある住宅を除く長方形平面に共通して、敷地からエントランスまでは、奥へと引き込むようなアプローチとなっていた(③⑥)。

### 3-2. 平面における機能的結節点

リビングとダイニングとキッチンとその他の諸室のかかり合いから機能的結節点を考察していく。「E-H-L-D-K」といった回遊性のあるプランが見られたのは6件(①③④⑤⑭⑰)、そして、「E-L-D-K-S-E」のループは1件確認できた(⑩)。本稿で見た全住宅に共通する点として、ダイニングはリビングとキッチンの両方に接続されていた。さらに、ダイニングからエントランスや個室にアクセスできる作品(① D-L.K.H ④ D-L.K.B ⑥ LD-K.B.WR.EH ⑦ D-L.K.E.Fa ⑩ D-L.K.E.B ⑪ D-L.K.C ⑭ D-L.K.E)が17作品中7作品もあり、ダイニングが動線の基点となっていると考えられる。生活の動線という明確な機能としての結節の場所が、ダイニングとして捉えられる。吉村は、「家族を揃って食事をする事は、今日の住宅の大切な機能である。」<sup>4</sup>と述べており、家族の基点となる位置にダイニングを配置していることが確認できた。

### 4. ダイアグラムCから見る前期住宅作品の平面構成分析

#### 4-1. 平面における暖炉・リビング・中間領域・庭の関係

第3章でL型平面及び雁行型平面におけるリビング開口部に触れたが、ここではダイアグラムCを用いてより暖炉とリビングと中間領域と庭の関係について考察していく。

17作品の内全作品におけるリビングが、庭及び主風景と面していた。リビング内部の長椅子に座ったときの視点から見た外部開口と暖炉の配置関係について以下のことが見られた。正面に主開口を左右一方の面に暖炉を配置するもの(③⑤⑧⑨)、L字型2面に主開口と左右一方の面に暖炉を配置するものが見られた(①②④⑦⑪⑮⑰)。また、暖炉がない住宅は6件あった(⑥⑩⑫⑬⑭⑯)。

暖炉は、外部(庭)と背中合わせまたは垂直に接している住宅が多く見られ、リビングからの視覚的な眺望を、暖炉から庭へとずらす手法を用いていた。これは、いわばカメラワークにおけるパンと同様の空間効果を生んでいると言える。そして、L字型2面に主開口を設ける住宅が多いことと併せて考えると、吉村は視線の中心を固定した風景を作らないようにしていると言えるであろう。

また、リビングと庭との間に、テラスや縁側といった多様な中間領域を設けており(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑪⑭⑮⑰)、内部空間と外部空間の連続性をより強調していることが考えられる。

#### 4-2. 平面における構成的結節点

第3章でダイニングが機能としての結節点であったのに対して、動的風景を生成する構成的結節点としてリビングが位置することが見てとれた。そのことが、顕著に表れている④千駄ヶ丘の家を例にとってみると、リビングか

らの視覚的な眺望を、室内奥から暖炉を經由して庭へとずらす手法を用いて風景を創り出している。このことは、静的な風景から動的な風景として移りゆくとともに、リビングが構成的結節点になると捉えられる。

### 5. おわりに

吉村順三の前期住宅17作品の平面図を3種のダイアグラムを用いて分析した結果、以下のような特徴を有する平面構成システムが明らかとなった。

- 1) 前期住宅作品の平面形状は、大きく雁行型・L型・長方形型・への字型の大きく4タイプに分けられる。
- 2) ダイアグラムBを通して、機能としての結節点にダイニングが位置することが確認できた。このことは、ダイニングがリビングやキッチン、寝室などへの生活動線の基点になるという、ダイニングが機能要素として作用していることを意味する。また、「家族を揃って食事をする事は、今日の住宅の大切な機能である。」と吉村自身も述べており、家族の基点となる位置にダイニングを配置することを、吉村は意識的に実行していたことが確認できた。
- 3) ダイアグラムCを通して、動的風景を生成する構成的結節点としてリビングが位置することが見てとれた。
- 4) 暖炉という内(リビング)の中心が、外部(庭)と背中合わせで接している住宅が多く散見され、リビングからの視覚的な眺望を、暖炉から庭へとずらす手法を用いていることが明らかとなった。また、リビングと庭との間に、テラスや縁側といった多様な中間領域を設けており、内部空間と外部空間の連続性をより強調していることが考えられた。

本研究を通して、吉村の前期住宅作品の平面構成システムの一部が明らかになった。今後の展望としては、1978年以降の彼の住宅作品においても、ダイアグラムを用いた平面分析を通して、彼の設計概念や平面的特徴に迫ってきたい。

### 注

<sup>1</sup> 吉村順三『吉村順三作品集1941-1978』新建築社、1978年。

<sup>2</sup> 武森祐次、福原和則「吉村順三の住宅作品における居間の内部と外部の関係に関する研究-1954年から1980年までの17作品を通じて-」日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系(58)、2018年6月、645-648頁。①設計手法を明らかにする研究としては、榎本英恵、八代克彦「吉村順三の住宅設計手法に関する考察-その1」日本建築学会学術講演梗概集、1999年7月、573-574頁。②設計思想を明らかにする研究としては、福岡有希、平瀬有人「吉村順三「軽

井沢の山荘（吉村邸）」の設計背景に関する研究－「軽井沢式」に着目して－」日本建築学会九州支部研究報告第55号、2016年3月、705-708頁。③住宅作品の特徴を明らかにする研究としては、倉掛健寛、太記祐一「たまり空間と開口部の寸法の関係性に関する研究～吉村順三の住宅作品にみる特徴～」日本建築学会九州支部研究報告集第48号、2009年3月、861-864頁などがある。

<sup>3</sup> 前田忠直「17作品のフォームの意味—ルイス・カーンの

住宅作品におけるフォーム生成過程の研究1—」日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 (36)、1996年7月、1313-1316頁を端緒とする一連の研究において、フランク・ロイド・ライト、アルヴァ・アアルトらの「住宅作品における生成過程」が解明されている。

<sup>4</sup> 吉村順三『吉村順三作品集1941-1978』新建築社、1978年、22頁。